

# 雪嶺集

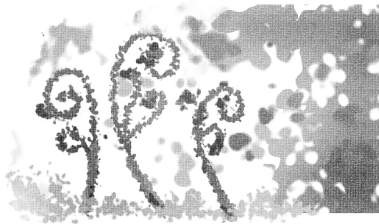
〈宮坂静生 鑑〉

顛末(2)

小林 貴子

一次退院 三句

冬 茜 仮 の 眼 で 世 に 戻 る  
風 花 や 園 児 の や う に 迎 へ 待 つ  
我 と い ふ 空 蟬 娑 婆 へ 戻 す と よ  
討 入 の 如 く に 教 授 総 回 診  
年 の 果 好 事 魔 多 し と は 何 ぞ  
独 り に は 慣 れ て は る が 暖 鳥  
ぬ ば た ま の 実 や 瞳 け ど 瞑 れ ど  
あ ら ぬ 方 向 き を る 目 玉 初 鏡  
「真の闇より無闇が怖い」初みくじ  
円 城 寺 龍 に 逢 ひ た し 半 仙 戯



見守らる

佐藤 映二

胸 を 突 く 旋 律 の 湧 く ま で 枯 野 道  
常 念 岳 に 見 守 ら れ を り 初 句 会  
船 方 ふな がた は 沖 女 衆 おっべし に 浜 焚 火  
お こ そ 頭 巾 せ つ せ つ 鱒 汲 み 上 ぐ る  
太 平 洋 の ぞ む 智 恵 子 に 千 鳥 くる  
光 太 郎 に 素 足 の 智 恵 子 松 の 花

四季と折り合つ

佐藤 映二

第六十三回角川俳句賞の金星を射止めた月野ぼぼなさんは、受賞の喜びを二十五年の米国生活の中で最大の幸運だと語られた。ピアニストの夫と里帰りした伊那谷では、米寿を迎えた祖母ともども喜びを分かち合ったという。  
句歴十五年、句作の過程でびったりの言葉を得る瞬間について、体のどこかが笑っているような気分と表現する彼女だが、六年前に北九州で催された現代俳句協会全国大会で同新人賞を受賞した時の印象と変わらず、底抜けに明るい。我が

主宰の名を挙げるや「宮坂先生、だーい好き」と声を張り、筆者と意気投合してハイタッチと掌を打ち合う場面も。  
今回で十回目になる応募作五十句の表題「ひとのかたち」は「まだ人のかたちで桜見えています」から採られた。  
選者代表で壇上上がった仁平勝氏絶賛の三句は、  
まばたきで仕上げる春の付け睫毛  
息止めて聖夜の肉に刃を入れる  
コスモスの風がギプスの子に届く  
正木ゆう子氏の推奨句は三句目と「一匹の芋虫にぎやかにすすむ」。筆者一推しは、「潰されて車は野紺菊のもの」。